

「社会を明るくする運動」

鹿ノ台小学校 五年 源 楓紗

私は学校で何度も「こまっている人がいたら助けてあげましょう。」と教えられていました。本でも道徳の教科書でもたくさん読んでいました。ある本には、電車に乗っていたら、杖をついたおばあさんが乗ってきた話のつていました。主人公は席を譲った方がいいのはちゃんと分かっています。でも勇気が出なくて、結局「座っている人にもその権利がある。」「譲らないといけないわけじゃない。」と自分に言い訳をして、席を譲りませんでした。私はこの本を読みながらどうして譲ってあげないんだとずっと思っていました。自分だったら絶対譲るのにも思いました。でもそれは思うだけだから簡単なんだと三年生のときに知りました。バスに乗っていたら、杖をついたおじいさんが乗って来ました。そしてその杖は白色に赤い線が入っていました。でも私はそのとき、変わった杖だと思っただけでした。そして、運転席の真うしろの席を譲りたくなくて、おじいさんあつかいするなと言われるのもこわくて譲れませんでした。本の主人公の気持ち少し分かったのはそのときでした。バスをおりてから母に、「あの色の杖めずらしいね。」と私が言うのと母が白杖の意味を教えてくださいました。私はとてもおどろいていました。そしてかわいそうだと思いました。

社会が明るくみんなが過ごしやすいところになるには、みんなが白杖のような印を知って親切心を持つことが重要だと思います。でも、偏見や差別をすると、ぎやくにその人は過ごしにくくなってしまいうから気をつけようとも思いました。学校では障がい者には特に親せつにするように習います。でも最近はその偏見ではないかとたまに思います。全員がそうとはかぎらないけれど、もし私が車いすに乗っていたとしたら、まわりから「かわいそうな人」として見られるのは絶対にいやだと思います。その人たちにむりに親切心を持たれたり同情をされたらいやな人は必ずいると思うから、これからもみんなと同じように接したいとは思っています。バリアフリーと言うのも社会を明るくすることのできるものだと知りました。小さいころに点字ブロックの上を歩いて遊んでいた

たことも後かいました。4年生のときの福祉活動について学んで手話
体けんやアイマスク体けんをしたからです。特にアイマスクをつけて歩
くのはとても不安なことでした。たよりになるのは手の感かくだけだと
いうことを、身をもつて学びました。これからは、そのけいけんを生か
して、社会が明るくなるようにいろんなことを考えて、みんなのことを
しっかり考えられる大人になりたいと思います。

助け合いで世界は変わる

生駒南小学校 六年 楠瀬 虹心

私は、「社会を明るくする運動」で大切なことは、『助け合い』だと思います。自分が知っている人も、知らない人でも助け合いをすることです。おたがい良い気持ちになります。しかも助け合いをすることで、やさしさや思いやりが自然と生まれると私は思います。助け合いを通してやさしさと思いやりが身に付くとふだんの生活や学校での生活でも生かすことができます。

私が助け合っているなど強く思った経験は二つあります。

一つ目は私が四年生ぐらいのとき、家族でどこ祭りに行きました。この日は運動場でやっている所ではなく、生駒駅周辺の屋台を楽しんでいました。次の屋台に行こうと移動していると、歩道でおばあさんが急にたおれました。すぐ気づいた私のパパと近くにいたおねえさんが「大丈夫ですか？」と聞きました。おばあさんは「大丈夫ですよ」と言いましたが、あごやひじから血がでていて、自分で立てなくなっていました。なので、パパとおねえさんが一緒におばあさんを支え、家まで送ることにしました。「すぐそこなんだけどねえ」とおばあさんが言っておばあさんが言うとおりに行くと、ぐるっと一周して、たおれた場所にもどってきてしまいました。これはあぶないかもしれないと思い、近くの病院につれていきましたが、休館日でいすにだけ座らせてもらいました。休けいしている間に、パパがすこし荷物を見ますねとおばあさんのバッグの中を調べていると、おばあさんが行っているデイスリーブのカードがでてきて、そのカードにかいていた電話番号にかけると、病院にむかえに来てもらうことになりました。

おばあさんは、熱中症だったらしく、水をのむと、少し元気になりました。デイスリーブのお兄さんが来て、外に出た理由を聞くと、おばあさんの家は山の近くで、リモコンの電池を買いにいこうと、たくさんあつい中歩いたからたおれてしまったということが分かりました。お兄さんとおばあさんが、「本当にありがとうございます」とお礼を言ってくれました。「お祭りの時間を減らしてしまつてごめんね。今から楽しんで

ね」と言っておばあさんとお兄さんが帰り、おねえさんとも別れ、お祭りを楽しみました。後日、お兄さんから電話がかかってきて、おばあさんはすごく元気になり、おばあさんもぼくもすごく感謝しています。本当にありがとうございますと言ってもらい、うれしかったです。

二つ目は短い話ですが、ママと出かけている時に駅で白杖を使っている人がいました。その人は点字ブロックの上を白杖を使いながら歩いて、改札口の前でどうやって入ったらいいのか分からないのか、こまっっていました。ママと一緒に助けようと思いました。近くにいたおばさんたちが「大丈夫かー？どうしたん？」と聞いていてこまっていることを伝えていました。おばさんと駅員さんに助けってもらってホームに入っていくのを見ました。

今の二つの話の中で助け合ったのは五回です。助け合うとおたがい良い気持ちになります。知らない人だから助けたくないなどそんな考えがなくなっしてほしいです。今私は六年生だけど、二年前のことも助け合いをしたから覚えています。これから生きていく上で、助け合いは絶対必要です。これからも助け合いをたくさんして、たくさんの方がいい気持ちになっしてほしいです。私も助け合いをずっと大切にしていきたいです。

だれもがくらしやすい世の中に

あすか野小学校 五年 坂本 朱

私には二才下の弟がいます。弟は明るくて元気で、毎日楽しそうに友達と遊んでいます。そんな、どこにでもいる小学生の弟ですが、他の子とはちがう事があります。弟は生まれた時から耳の聞こえが良くありません。でも話す事も自分の耳で聞き取る事も出来るので弟自身も家族も耳の事をあまり気にする事なくすごしてきました。

そんな弟とこの前、家で兄弟げんかをしてしまいました。私は怒りに任せて弟の耳元で少し大きい声を出してしまいました。すると弟は急にポロポロと泣き始めました。(何でこんな事くらいで泣くのだろう。)そう思っている私に母は、

「こうちゃんは、ちようどいい音のはばがせまいから、朱にとっては少し大きいだけの音でも、とても大きな音に聞こえてつらく感じる事があるから気をつけてあげないと。」と言いました。弟の耳の事をすっかりわすれてしまっていた事に気付き、ひどい事をしてしまったと反省しました。

今回の出来事のように、自分にとっては普通に感じている事でも、他の人には不便に感じる事がたくさんあります。四年生の時に点字について学びました。じゆ業の中で、様々な物や場所で点字が使われている事を知りました。しかし、薬の箱など点字がない物もたくさんありました。だから、もっと点字の表示が当たり前になれば、だれもがくらしやすい世の中になるのではと感じた事を思い出しました。しかし、実はそれはとてもむずかしい事でもあると思います。なぜなら、一人一人に個性があって、性格がちがうのと同じ様に不便を感じる事やこまっている事がそれぞれちがうと思うからです。では、どのようにすればだれもがくらしやすい世の中にする事が出来るのでしょうか。それは、助け合いの気持ちや思いやりの心を持つ事だと私は思います。こまっている人がいれば出来る人が助けてあげる。そんな事が自然に出来る世の中になれば、きっと、だれもがくらしやすい世の中になっていると思います。それが社会を明るくするのだと私は思います。